

保育者養成におけるピアノ指導法の提案
 —バイエル98番のリズム・モチーフに身近な発音
 ‘アマナットー’を当てはめる習得法の試み—

阪 田 順 子

How to Teach Piano,
 Case of Bayer No.98 with ‘amanatto’ recitation

Junko SAKATA

要 旨

保育者養成のピアノ教育における、学生の時間的・心理的負担軽減の方法の提案が目的である。本論では、特に学生の習得しにくいリズムを持つバイエル98番を例にとり、理解しやすい方法の提示を試みた。この数年間実際のレッスンで成果をあげたことでもあり、他の同様の曲にも応用が効くものと考えられる。

キーワード：保育者養成、ピアノ指導法、バイエル98番、リズム教育、甘納豆

I. はじめに

保育者養成におけるピアノ初心者への指導は、我々の大きな課題である。中でも習得しにくいリズム型には殊に時間をかける。その結果すんなり理解し、実技に反映できる者もいれば、頭では理解ができていても歌で表現できず、指の動きに移すことが難しい者も、また口ずさめるのだが指の動きに転換しにくい者もいる。それぞれの段階に対処するためには、相手の能力を知りスタート地点を確認して一歩ずつ導くことが求められる。根気の要る作業であるが、目安があれば一つずつ進むのに分かりやすい。本論ではその問題への足がかりを考えてみた。

II. 問題の所在

保育者養成で求められる最小限の曲の数々には、付点を使ったものが多い。4分音符を3：1に分割した付点リズムは（譜1.）躍動感を表現するのに使われ、幼児歌曲中、保育現場で用いられる一日の始めと終わりの歌は殆どがこれで占められている。



譜1. 保育者養成中最もよく使われる付点リズム

ピアノ指導担当者の一番の悩みは、このリズムを正確に伝授することであり、はじめからすんなり習得できるものもいるが、できない者はギリギリのリズムの壁が破れず、不正確、または肉

薄はするが靴下搔痒の感があり、あと一、二歩のところまで未完成に終わる例が多い。指で表現できず、体を揺らして何とか近づけようとする試みもあるが、やはり一時的な解決にしかならない。

養成中に習得できないということは、保育の現場に投げ出されたらもう習得の機会はほとんど期待できない。ゆえにバイエル等初期のピアノ訓練の段階で正確な付点リズムの体得が求められるのである。

楽譜によっては、下記の二種のリズムのどちらでもよい、と断り書きがしてあるものもある。(譜2.)



譜2. 近い二種のリズム

例として次の6曲をみていこう。¹⁾

この6曲は、現在本学で使っている教科書より、保育現場で使われる頻度の高い順に筆者が選んだものである。

1. 『きたかぜこぞうのかんたろう』：この曲の曲想は“ウェスタンのように”とあり、少しのんびりトボトボした雰囲気を出すために鋭い感じを特に出さなくてもよいため、近い二種のリズムのどちらでもよい、としているのであろう。
2. 『おばけなんてないさ』：この曲も、必ずしも鋭いリズム感を打ち出す必要はないため、二種のリズムのどちらでもよい、としてあるのだと思う。むしろ音符を結ぶ三連符の印が曲中に記されては楽譜が煩わしくなるため、付点型で記譜されているのだと考えられる。
3. 『せんせいとおともだち』：この曲では、どちらでもよい、というのは当てはまらないと思う。なぜならばこの曲は付点を正確に3：1で弾くことによって曲に弾みがつき、歌う気持ちに推進力を与える役目を担っているからである。
4. 『アイスクリームのうた』：この曲も3.の曲同様で、曲全体が付点でできているといっても過言ではないため、三連符型にしてしまうと、曲自体の推進力が落ち、美しい仕上がりに結びつかないことになると思われるので、3：1を正確に守るのがよいであろう。
5. 『にじ』：音の数が多いため、より美しく弾き上げるためには16分音符の短さは正確に心がけるべきであり、三連符型に流れてはいけぬ曲だと思われる。
6. 『夢をかなえてドラえもん』：曲中の殆どが付点リズムでできているため、3：1が正確に弾けないと、曲の途中で弾き手がスタミナ切れを起こし、後半のリズムが重苦しいものになり、元気な子どもの勢いあるスピード感についていけなくなり、両者ともに不満の残る結果が予想される。人気曲でもあるので子どもの失望感は想像にあまりある。

確かに、これらは「よく聞けば違う」とピアノ初心者の学生が感じるレベルの近似したリズムではある。しかし、この2種の違いがわかり、それを実技で表現することができるかできないかは、将来的な学生の鍵盤楽器人生、保育者人生に大きな影響を及ぼすのは明白である。習得できている者でも、疲れていい加減に演奏すると二種が不正確になることもある。弾き損じてそうなることもあるし、想定できるケースは枚挙に暇がない。

また、幼児教育でのリズム感習得は大変重要で、間違ったリズム、いわゆるリズム感の悪さを

体得させてはならない。

問題点として浮上している限り、解決するしかない、つまり二種を正確に弾ける学生を育てることが先決なのである。本論では、この付点リズムの個々の練習の推奨の最終的な形として、付点リズムが更に昇華したバイエル98番を例に、学生への指導へのヒントとして「98番と甘納豆」を提案したい。(譜3.)²⁾

譜3. バイエル98番：冒頭部

幼児教育は人間教育の基盤であり、間違ったリズム、いわゆるリズム感の悪さ、を体得させてはならない。これは教育上非常に重要なことで、教える保育現場の教師が子どもたちに正しくないリズムを教えることは罪悪に近い。そのためにも我々保育者養成に関わる者の責任は殊更重いのである。

Ⅲ. 研究方法の提案

以下の順に進める。

1. 学生へのピアノレッスン中に行う。(本学ステップ5に達した学生が対象)
2. 同じステップ5のレベルであっても、実力には差があるため、幅のある各学生の到達実技力に対応するため、従来行っている方法と新しい提案を使った方法を使い分ける。

従来行っている方法は以下の通りである。

まず、指導者が98番を模範演奏し、学生に曲の雰囲気をつまませる。反応を見て、掴み取っていない感じが感じられれば再度演奏する。「なるほど」という表情が出たら、次に第1-2小節のリズム・モチーフを弾いて聴かせる。更に3回、間を取って弾いて聴かせる。

リズム・イメージが頭に入った様子を確認し、模範演奏のCDを手渡し、一日5回聴くよう指示する。一週間後のレッスンにて学生が弾けているかどうかを確認する。

また、どちらの方法を使うか、の選択決定の観点と尺度は以下の通りである。98番に至る過程で既に、新しいリズム・パターンへの適応度が高い学生は、従来の方法で充分習得できると予想がつく。一方それまでのレッスンで新しいリズム等の理解度、習得度が遅い実績の学生は、後述の方法を最初から試みるのが効率的であると考えられる。

3. ②の二つの方法の差異を検討する。

具体的な差異のうち、最もわかりやすいのは習熟に要する時間等の違いであろう。本学の各回のレッスン時間(10~15分)の中でどれくらいかかったか、更には延べ何回のレッスンに関わったか、を比べて検討の手がかりにする。それに加えて、教師が感じる学習成果の充実感も加味することになる。

4. 曲として仕上がった状態を再検討する。検討する目安は以下の通りである。

- ・第一段階：楽譜どりの音が正しく弾けている。

- ・第二段階：止まらず滑らかに弾けている。
- ・第三段階：曲としての体裁を形作っている。

IV. 指導方法

学生のリズム感習得のための提案である「アマナットー」を口ずさむ目的と、この語を選んだ理由は以下の通りである。

98番のリズム・パターン（最初の4音符ぶんのワンフレーズ）は、日本語の[アマナットー]（発声時にはカタカナ表記にする）と同じであることから、親しみやすい身近な語（といっても納豆は知っているが甘納豆は知らない学生もあり、実物を見せるひと手間が必要だと感じたこともある。）で慣れさせて、打鍵への心の準備をするためである。また心理的にも、西洋古典音楽と卑近な日本の食べ物とのミスマッチ感により緊張がほぐれ、堅い雰囲気のレッスンに柔らかかみが生まれる効果もねらっている。

また、甘納豆以外の言葉の可能性（更に良い効果を生み出す語）を探すことは、次の課題に含めるつもりである。

1. 教師が模範演奏を行う。（1回演奏し、その後学生との会話を挟み、2回目の演奏を行うと、学生の心身と脳裏に浸透しやすい）
2. 最初の右手のフレーズ二小節分を何回か教師が弾く。（目安は3回）
3. 同じ箇所には歌詞「アマナットー」を付け、教師が口ずさむ。（目安はまず3回）

ここで多くの学生は意表を突かれたような表情をする。「なるほど」という顔をする者、やや驚き「なんで甘納豆？」という表情の出る者、クスッと笑う者、大体がこの内のどれかである。「私は納豆が苦手で」と言い出した者もいた。好き嫌いは演奏上関係ないとはいえ、イメージの影響は大きいと思うので、納豆と甘納豆は異なる食品で、味わいも見た目も全く別物であると説明する用意が必要であると思う。特に関西圏では納豆が苦手な者もいるときく。学生の感受性への配慮も必要であろう。

4. 学生と教師がともに「アマナットー」を口ずさむ。（目安は3回）

ここで、演奏者席を交代し、学生が右手のフレーズをゆっくり弾く。教師はそれに添うように「アマナットー」を口ずさむ。2回目は少し早くしてみる。それが成功すれば3回目はさらに少しだけ早くしてみる。（1回目にあやうさを感じられるようならば、2、3回目もゆっくり噛み締めるように弾かせるようにする。理想のテンポで弾くことは後々ゆっくりさらえばよく、肝心なのは正確な基礎固めである。ゆっくりであっても正確な配分で弾ければ、早く弾けるようになるのは回数と時間の問題だと考えるからである。）

また、これがうまくいかないようならば、4.のはじめから再度繰り返してみることである。（ただしこれまでにそのような例はなかった。）

5. リズムを体得したように思えたら、左手部分（伴奏部）を教師が弾き、学生の右手と合わせる。
6. （両者分担）を3回繰り返す（4.と同様に学生は右手を担当）。
7. 次に左右交代して、学生が左手部、教師が右手部を弾く。（目安は3回）
8. 7. に慣れ親しんでから、学生にゆっくりと両手で合わせて弾かせる。（3回を目安に繰り返す）ここは学生にとって大変冒険的な部分であると思う。片手ずつを両手でというのは1+1ならぬ、2の二乗以上の恐れと期待の瞬間であるので、注意深く見守ることが大切である。
9. CDを聴くホームワークを課す：一週間後の次回のレッスンまで繰り返し聴くこと（一日5

回を目安に)を課す。聴くときの注意は特にしない。ただぼうっと聴くだけでよいと告げることが多い。(他の授業からの宿題もあろうし、学生の負担軽減の意味もある。)学生のレベルに合わせ、一日3~5回が無理のないところと考える。ピアノからはなれて音だけに集中し、曲に向かい合う心構えをつくるためである。

V. 考察

これまで筆者のピアノレッスン中にこれを行った8名の学生のうち、最終的に美しく正確に弾けなかった者はいなかった。もちろんバイエルの100番前後は、ピアノ技術習得の基本のほぼ全体をまとめるレベルに達しているわけだから、「98番に挑む」ということはすでに基本的技術は習得している者ということにはなっている。

しかし、教則本の常として、進めば進むほど新しいテクニックに挑戦せねばならず、常に挑戦を積み重ねて進んでいくわけであるから、98番で突然足踏みすることもあるわけである。そして98番が越えられないために挫折感からやる気を失い音楽への興味も失せる可能性は無きにしも非ずであり、せっかくここまで積み上げてきた努力が報われにくい結果となることもある。

そのためにも、98番はリズム的にピアノ指導の要であり、これをスムーズに通過させる工夫がわれわれ教師に求められていると思う。本論はそれへの提案である。

最後に、筆者のあげる今回の提案に関する理論的支援になると思われる2つの先行研究(1)(2)をあげる。

(1)井上直幸氏は著書『ピアノ奏法—音楽を表現する喜び』の中で、付点のリズムに関するピアノ教育の重要性を述べている。³⁾要約すると以下ようになる。

「♪は、正確に3:1で弾く場合と複付点のように弾く場合があるが、大まかに言えば、ゆっくりのテンポの時は前者で十分であるが、速いテンポの時は複付点♪のように長さに差をつけて弾くのがよく、♪を長く♪を少し短めに、弾力性のある厳しいリズムで、その方がリズム感がよい印象になる。付点のついた音の次の短い音は、その次の音につける感じで弾くことが仕上がりに良いのである。」

このことは、長くピアノを学んでいる者にとっては当たり前のことなのだが、初心者にとっては、視覚的に繋がっているペアの音型は、2つ目の音が(内部的には)前の音ではなく、むしろ次の音と密着しているなどは感じにくいためである。しかし演奏時は、次の塊に依拠する奏法が表出音楽的にはより美しく聴こえ、それがまた作曲者の意図であるということなのである。

筆者が理想とする付点の美しい演奏は、保育現場で多用される付点の多い曲が幼児の耳に入るとき本領を発揮する。そのために工夫を凝らし、何とか学生に綺麗な付点演奏を習得してほしいのである。その工夫の一例が今回の「アマナットー」提案であり、決して奇を衒ったものではない。

(2)日本ダルクローズ音楽教育学会の創立35周年記念論文集の中で、伊藤仁美氏は⁴⁾[保育者養成とリトミック]として「保育者養成における音楽的表現授業に関する一考察 —「動きを通して音楽を学ぶ」ことの効用と課題—」を発表している。この中で氏はダルクローズの提唱する「身体の動きを通して音楽を感受する耳(内的な耳、心の耳)の体得」に重きを置いている。特に「心を活気づける感動と、表現についての感覚をつくりだすこと」を大切に保育者養成をおこなっていると感じられる。

筆者はこの「表現についての感覚をつくりだす」に大いに共感している。本稿の核である「アマナットー」を98番に当てはめるのはまさにこの作業なのである。

また、鈴木恵津子氏は同学会の創立30周年記念論文集の中で、「保育者養成におけるピアノ指導に関する一考察—グループレッスンへのリトミック教育の応用—」として、98番を指導する際にジャンプをとり入れた身体表現を用いることで、学生の演奏が驚くほどに軽やかでリズムカルになったことを報告している。⁵⁾ 筆者と同じ目標を持つ、別の観点からのアプローチをした研究である。

学生にとっての98番が手のかかる楽曲であるのは古今変わらない。このリズム・モチーフの習得はピアノ上達の大事なステップであり、特に保育者を目指す者には要の通過点である。筆者の本研究の意図もここにある。

VI. 課題

98番同様、学生が超えにくい関所のような曲はいくつか考えられる。筆者の経験からは88番と「ゆきやこんこ」を次の課題としてあげたいと思う。学生の自然な音楽感を使って習得成功に導くささやかな提案である。この他にも多くの同業者からのアイデアをいただきたいと考えている。

また、付点を正確に綺麗に弾く指、腕、体幹の使い方も次の課題としたい。

VII. おわりに

保育者養成におけるピアノ指導は、限られた時間のタイトなスケジュールで行われる。余裕などはなく、予定通り進んでやっと及第に達するのが現状である。進度の早い学生にとっても、ピアノ以外に歌、楽典、身体表現等マスターせねばならない課題は山積みであるので、常に目の前の課題に追われることになる。

ましてや進度が遅れ気味の学生にとっては、心理的にきつい状態が常である。そのようなとき、課題の1曲1曲が少しでもスムーズに理解、実践できれば、積もった課題の山に風穴が空き少しづつ楽になるはずである。

我々ピアノ指導者の細かい配慮で、それは累積可能であろう。課題を見直し、僅かな時間と労力でも軽減されるならば意義あることと考える。今後は、どの課題曲にも学ぶ者への軽減を念頭に置いた配慮を重ね、本論同様の努力を積み上げていきたいと考える。

謝辞

本研究をすすめるにあたり、本学短期大学の学生8名のピアノレッスンを参考にした。ここに謝意を表する。(2016, 2017年度基礎音楽 I & II、音楽表現 I 受講生のうち、筆者が直接ピアノ指導担当となった学生である。)

引用文献

- 1) 板東貴余子編：こどもの歌ベストテン、簡易伴奏による 改訂新版3刷, ドレミ楽譜出版, 東京 pp.72-73, 42-43, 14, 104-105, 108-109, 129-131, 2016 (2014)
- 2) 初級ピアノ・テクニク 速習ステップス 保育者、教員をめざす人のための：音楽之友社, 東京, p.36, p.28, 2014
- 3) 井上直幸：ピアノ奏法—音楽を表現する喜び 4刷, *Der Weg zum lebendigen Klavierspiel*, 春秋社, 東京, pp.141-142, 1999 (1998)
- 4) 伊藤仁美：保育者養成における音楽的表現に関する一考察 —「動きを通して音楽を学ぶ」

ことの効用と課題—A Study of Musical expression class in Teacher Training Course: An effect and a problem of learning music through movement, 日本ダルクローズ音楽教育学会編：リトミック研究の現在, 日本ダルクローズ音楽教育学会創立30周年記念論文集, 開成出版, 東京, p.188 l.8-25, 2003

- 5) 鈴木恵津子：保育者養成におけるピアノ指導に関する一考察—グループレッスンへのリトミック教育の応用—A Study of Piano Teaching Method in Teacher Training Course: The Application of Dalcroze Eurhythmics to Piano Group Lessons, 日本ダルクローズ音楽教育学会編：リトミック実践の現在, 日本ダルクローズ音楽教育学会創立35周年記念論文集, 開成出版, 東京, p.61 l.11, 17, 2008

参考文献

1. 藤拓弘：ピアノ講師の仕事術 音大では教えない7つのこと, 音楽之友社, 東京, 2012
2. チャールズ・ローゼン, 朝倉和子訳：ピアノ・ノート, みすず書房, 東京, 2009
3. T.E.カーハート, 村松潔訳：パリ左岸のピアノ工房4刷, *The Piano Shop On The Left Bank*, 新潮社, 東京, 2002 (2001)
4. ジョン=ポール・ウィリアムズ, 元井夏彦訳：ピアノ図鑑 歴史、構造、世界の銘器, *An Inspirational Guide To The Piano And Its Place In History*, ヤマハミュージックメディア, 東京, 2016
5. 川染正嗣：明解ピアノ上達法, 3刷 (株) ショパン, 東京, 2004 (2003)
6. フィリップ・ウィルキンソン, 大江聡子訳：50の名器とアイテムで知る図説楽器の歴史, Philip Wilkinson: *THE HISTORY OF MUSIC IN FIFTY INSTRUMENTS*, 原書房, 東京, 2015
7. 安田寛：バイエルの謎 日本文化になったピアノ教則本, 音楽之友社, 東京, 2012
8. 山本美芽：自分の音聴いてる? 発想を変えるピアノ・レッスン, 春秋社, 東京, 2012
9. 日本音響学会 *The Acoustical Society of Japan*, 西口磯春編著：ピアノの音響学、音響サイエンスシリーズ9, コロナ社, 東京, 2014
10. 小林緑編著：女性作曲家列伝, 平凡社選書189, 平凡社, 東京, 1999
11. マックス・ウェイド=マシューズ, 別宮貞徳監訳：世界の楽器百科図鑑 楽器の起源と発展 *The World Encyclopedia of Musical Instruments*, 東洋書林, 東京, 2002
12. 長尾泰, 川俣隆著, 新日本フィルハーモニー交響楽団協力：楽器の事典 *Cyclopedias of Musical Instruments*, ナツメ社, 東京, 2009
13. トム・ゲルー, デイヴ・ブラック著, 元井夏彦訳, 八木澤教司監修：エッセンシャル・ディクショナリー 楽器の音域・音質・奏法, ヤマハミュージックメディア, 東京, 2016
14. 小谷秀行：色彩楽譜「音のコード化」による音楽の数値解析, 星雲社, 東京 (大阪), 2015
15. 雁部一浩：ピアノの知識と演奏 音楽的な表現のために, ムジカノーヴァ, 音楽之友社, 東京, 1999
16. ファニー・ウォーターマン, 石井史子訳：若きピアニストへ ピアノ指導と演奏について, (株) ショパン, 東京, 2003
17. セイモア・バーンスタイン, 佐藤覚・大津陽子訳：心で弾くピアノ 音楽による自己発見, 音楽之友社, 東京, 1999
18. ドン・グリーン, 辻秀一訳：ジュリアードで実践している 演奏者の必勝メンタルトレーニング

- ング, ヤマハミュージックメディア, 東京, 2013
19. 日本音響学会編, 岩宮眞一郎編著: 音色の感性学 音色・音質の評価と創造, コロナ社, 東京, 2010
 20. ボリス・ベルマン, 阿部美由紀訳: ピアニストからのメッセージ 演奏活動とレッスンの現場から, 音楽之友社, 東京, 2009
 21. 大塚茜監修: 楽譜がスラスラ読める本, 永岡書店, 東京, 2016
 22. 板東貴余子編: こどもの歌ベストテン 簡易伴奏による 改訂新版, 3刷, ドレミ楽譜出版, 東京, 2014 (2003)
 23. 初級ピアノ・テクニク 速習ステップス 保育者、教員をめざす人のための: 音楽之友社, 東京, 2014
 24. バイエルピアノ教則本 標準版, 全音楽譜出版社, 東京, 出版年未記載
 25. 標準バイエルピアノ教則本・併用曲付, 全音楽譜出版社, 東京, 1955
 26. 全訳バイエルピアノ教則本, 全音楽譜出版社, 東京, 出版年未記載
 27. 柿田和子 KAZUKO KAKITA 編: 最新バイエルピアノ教則本応用曲付, 1版44刷, 全音出版社, 東京, 2006 (1990)
 28. 木村ケイ編: 指使いつき バイエルピアノ教本, 全音楽譜出版社, 東京, 1964
 29. 日本ダルクローズ音楽教育学会編: リトミック実践の現在, 日本ダルクローズ音楽教育学会 創立35周年記念論文集, 開成出版, 東京, 2008
 30. 藤井伊都子, 鹿島田章子, 原田由利子: リズム―初歩から応用まで― 4刷, 音楽之友社, 東京, 1988 (1986)
 31. エミール・ジャック＝ダルクローズ, 板野 平訳: リズムと音楽と教育, リトミック論文集 3刷, 全音楽譜出版社, 東京, 1977 (1975)
 32. 稲森訓敏: 演奏のための音楽リズムの表現法―リュシーメソッドの実習―, 音楽のリズム副教材, 中央アート出版社, 東京, 2011
 33. L.チョクシー, R.エイブラムソン, A.ガレスピー, D.ウッズ共著, 板野和彦訳: 音楽教育メソッドの比較―コダーイ, ダルクローズ, オルフ, C・M, 全音楽譜出版社, 東京, 1994
 34. 音楽現代編: ピアノ音楽辞典, 演奏篇 *Zen-on Dictionary of Piano Music*, 全音楽譜出版社, 東京, 1981
 35. 江口寿子, 夏目かおる, 江口彩子共著: ピアノレッスン Q&A, 全音楽譜出版社, 東京, 2000
 36. 井上直幸: ピアノ奏法―音楽を表現する喜び *Der Weg zum lebendigen Klavierspiel*, 4刷, 春秋社, 東京, 1999 (1998)
 37. 日本ダルクローズ音楽教育学会編: リトミック研究の現在, 日本ダルクローズ音楽教育学会 創立30周年記念論文集, 開成出版, 東京, 2003

参考音源

1. 田村宏: バイエル 音楽之友社: こどものバイエル (下巻・2) COCE-34445
2. 田村宏: バイエル 全音: こどものバイエル (上巻) COCG-10227
3. 田村宏: バイエル 音楽之友社: こどものバイエル (上巻) COCE-34443
4. 伊奈和子: ピアノレッスン バイエル教則本 (上) VICG-60817
5. 伊奈和子: ピアノレッスン バイエル (上) VICG-60102